始

内務
3.8.28 禁止
第1192號
東京

人頌記目次

◎色道契情讃……一
◎〇羅ノ辨……二
◎女人ノ〇〇ヲ菩々ト云説……五
◎女郎禮讃……八
◎とりかへばや……八
◎色道極意……〇
◎契情眞髄……一四

函
風140
號
永久保存
特501
300
國會
52.5.26
國會圖書館
77W19483

◎島原太夫……一六
◎色道好々譜……一〇
◎魚題……一二
◎石女論……一四
◎女郎買大意……二〇
◎色客の辨……二一
◎女郎の心を見わくる辨……二八
◎診説……二四

色道契情讃

此女は熱の物なり女郎様は平の物なりよく五臓を養ふといふこと
木草綱目にも見へず黄帝岐伯の思ひ付にもなしされども此事至極の
言葉なるかな○に入ていかなるうつけにもせよ女郎様と地女様とは
雪と墨とはおろかな事なり大佛と松风丁字ごまほどのちがひ先づ地
女は○○深く其にほひいやらしく○○○○○○○○亜然として睢
綬をたゞらかし鼻を損じ女郎様はおともなく香もなしといふ上天の
人にして其匂ひ○○○○○松伯のもとに貴び○○○うす〳〵と
したる処をめぐる其かたち至極奈しまづ心根にときめき目の病をい

やし酒の病をとく所謂かの楚の宋玉といひしすき人の風をかたちにのべしに比せば女郎は雄風なるべしそも〳〵其湿熱いかにして出ることぞいふに気の至らぬより出るといふ秘説なり

○羅刹辨

魔羅ハ梵語ナリ。コヽニ能奪命ト云、又障ト翻ス、能奪命ハ能ク人ノ命ヲ奪ト云ル義翻ナリ。又障ハ萬善ノ障トナル義ト云々。天魔羅波旬、地魔羅波旬、皆是障碍ノ神ナリ。故ニ名ツクナラン。漢字ハ厚、又厖、又峻、又ハ男○ノ名、又勢ト云ハ義読カ、問○○○ト云ハ如何、答○○ノ傍ラニ在ルモノナレバ屁ノ子ト云フカ。隣近釈

ニ近シ、夫人ノ○○○○○○○○○時ニ発シテ熾盛ナルトキハ○○○○○○○○○○○ク勢アリ。コノ時煩悩競ヒ発ッテ○○○○○ヲイタシ、生死流転ノ苦本ヲ造作シ、長時沈淪ノ源ヲ建立スアヽ哀カナ。四十二章理ニ、淫不断不可出産、実ニコレ諸苦ノ所因淫欲ヲ本ト為スナリ。男女相対シテ終ニ○○○。又男女相対セサレドモ見思ノ惑ニヨッテ凡ト妄念ヲ起シ、独頭ノ○○○ヲイタスモノ皆是空観ノ無キガ故ナリ。但淫欲ニカギラズ、六欲煩悩起レバ諸空空ク観セズ、不浄ハクセモノト知テ不隨、妄念止ム時ハ心源空ナク若ヨリ気シヅマル時ハミヨ〳〵○○○○○○○、只柔軟ニシテ空寂ナリ。カマヘテ彼ニ奪ルヽ事ナカレ、奪レテハ速ニ伏スベシ、能伏

スルヲ是金剛ベト云。傳ヘキクカノ武藏坊辨慶ガ如キ者、大金剛心也、生涯ニ蜂事ヲ犯セル事タダ二度ニシテ、一挙萬里シ甚麽ニ妄想ヲ滅却ス。又中岡正以ハ夫婦終ニ愛ヲ割テ膚不撓、士女烈丈夫ニシテ大壁固ノ信者ナリ。頓ニ諸法ノ有無非有無ヲ離ルヽ嗚呼是玄地成佛ノ入トゾ謂ベシ、然ルニ中世ノ行入柔弱生、河豚ハ食タシ命ハオシト、但此幻夢ノ境界ニ奪ハレ、大塵ノ街衢ニサマヨヒテ、此苦輪ヲ出ル事アヽハズ、浅マシキコトニアラズヤ、何卒金雞受臨終且暮ニアリ、早クツトメヨ早クツトメヨ

金剛林如是釈性戒識

女人ノ〇〇ヲ菩々ト云説

菩々トハ梵語ナリ。此ニ開ト翻ス。開ハ則〇〇〇〇ノ義翻カ。又開ノトキハ則開ハ家ノ開ニシテ依生ノ釈ナリ梵字〇ナリ。以上本説以下設事女ノ〇〇ヲ〇〇〇ト云フコト、上ノホノ字ハ菩提ノホノ字、下ノホノ字ハ煩悩ノホノ字ナリ。問テ云、上ノホハホノ音ナレドモ、下ハホンニアラズヤ。答テ云、煩ノ字漢音ハン、初五相通ナリ。本ホヲホントハネタル連声ニシテ、空黙ノ三内ヲ呼ブナリ。所謂ンノ假字是ナリ。ボン、ホム、ホウ、元来ミナ同ジ、又問ホホヲツヒト訓シタルハ如何、答ツヒハツミ也。ヒミヌ相同キ韻也。タヾ唇ノ輕重ノミ。

ッヒノ字ハ縁、又冤、又屬也、女人ノ〇〇又〇アナリ。又幽ト云ハ義読カツミハ造罪ノ義。入々是ニ依ツテ罪ナツクルコト多シ。因テ訓ジタルナリ。又尚。国ニヨツテ〇〇チベベト云。メメト云、メメト云ハ何ゾヤ。答フヘハホホニシテ則四五相通ナリ。メメハヘト相同キ也。扨此ホホニ一物ニ見ト云コトアリ。智者ハ一切ノ悪道苦悪ハ皆コレヨリ起ル。三界流転ノ皆根本也ト観通シテ悟ルカ故ニ、大菩提ノ善知識トナリテ死ヲ生離スルナリ。愚人ハ一切ノ楽ノ中ニ煩悩ノ悪知識トナリテ三界ニ流転スルナリ。可恐可慎。又云上ノホノ字ハ菩薩ノホノ字、下ノホノ字ハ凡夫ノホノ字ト云ハン。ホンノ

音ハ上ニ註ズルガ如ク、連声三内ノ音韻ナリ。上下ノホノ字但ニ〇ニテ縛シ不縛也。但菩薩ノホノ字ハ破縛ナリ。凡夫ノホノ字ハ繋縛ナリ。悟レバ三界ノ繋縛ヲ破シ、迷ヘバ生死ノ絆トナツテ、流転無窮一物ニ見唯心也。古歌ニ、世ノ中ノ人ノ心ハ傀儡師佛出サウト鬼出サフト。地獄ヘ堕テ萬劫苦ヲ受ルモ〇〇故ナリ。成佛シテ無量ノ法薬ヲナスモ〇〇故ナリ。唯悟ルト迷フトノ相違ナリ。貴ク懼シキコトニアラズヤ、〇字佛陀ナリ。可知佛身ハ菩提モ煩悩ニ不二ニシテ不可得也。古歌ニ、思ヒトクベヒトツニナリヌレバ氷モ水モヘダテザリケリ。然レドモ一切衆生ハ思ヒトクニヨシナシ。嗚呼悲哉永劫苦海ニ沈ムコトヲ

金剛林如是性戒識

女郎禮讃

地女にても後家をすく入は捨果の入なり後家をすく事は〇〇〇〇にするによりてなり〇〇〇〇すべてかゝ女郎どもに声たかきほど娘しがる女郎はいやしきものなり〇〇常の如くにしてよきほどよく世間にてもあの女郎は〇〇よしと聞てゆくはさりとて三十以上の入に爰し又若き入にもあれ共いやなり〳〵手前のかわゆきと思ふ客には一入〇〇つゝしみてあふべければ思ひ入有べし。

とりかへばや

地女のくせとして太夫と〇たゞも地女と〇たゞも同じことの物ぞと覚ゆるは井の内の蛙の大海をしらず夏の蚊の冬の氷をしらぬゞからは尤とは知りつゝもふとゞきヶ萬とかう言語にのべがたし学問文才もいたり〳〵て見れば皆むだ事なり手をよく書き伽羅奢に通じたるも皆むだ事なり清村三先生の曰予が学問二十両ならば賣に遣し申べしといへり論語に朋遠方より来るよろこばしからずやと宣いしもむかしの色友達ならば格別と道栄がいひしも嬢し吉原に縮緬の湯具をさせて見度といひしも尤ものことなり勉じて足の爪先よりつむりの上までとゝさまとかゝさまと〇〇〇〇〇出来し拙者たるものの色にはなるゝことならぬはむべなり余十三の時に唐学をまなび今ニ

十一の暮まで覚へし学文はれし太夫の〇〇とつりかへにしたし。

色道極意

郷古鴻漸など物語りするに、郷古が言ふには女房と妾とは妾の方がかゆらしいといふ、いろ〳〵べもちある事なり、文字に書きても妾と妻といふ字は各別にて、妻の方は肩杯もさし肩にて、どこやら角菱のえちたる様にしつこらしい文字なるに、妾の字は見てもなで肩らしくすつきりと見えて口元もかはゆらしげにうるはしう見ゆる文字なりといふ、妾を持に女房ありて持つは、其苦なれども色の気薄し如何にといふに、妾がべにも当分慰みにて始終の頼み少なし

と言ひ、たとへば如何程其妻がりんきの気がないにしろ男の方には甘味薄し、女房持たずに妾持って其男は男振もよく、而も、ゆくゆく本妻に直してやらんと云ふ約束あるならば実にてあるべし、女郎にても其べあるべし、女もとかく男の眞実か不眞実かをよく見極めてあふべしと言へり、たとへば気に入りたる女にて下座敷にすえ置き男女大勢つけて置くにも男は楽しむべあり、女は行末とても子にてもなければ男がもしものことありてもいかでか寄辺に懸るべきと行末にどうしても水臭きべあり大名高家の御部屋方といふにも子にてもなき内は楽じらるゝ事あらんなれども是は金銀をやりて歴々へ有つけてやり給ふと云ことあればまだしもなり、町人杯の様成者は

如何程持た長者と太はるゝとても〆元なきものなり、女のよく〳〵工夫すべきは身の落着といふものなり、如何に身の落着とても色も香も物の衆目も清き辨へぬ方に一生を任せたらんは口惜しからめ、よしや玉鬘の内待のひゝきの離を過ぎ給ひしべこそ思い居らるゝ、さ程共、女郎様方にても地女にても色といふものありていかなる貧なる手自から飯炊きも床には袖を引敷てなりともあの人ならでは嫌なり、一度あの人様にとならば夫婦と言は川て見たきと思ひ込であすは露の上に消ゆるとても、少しの身のようならん事を思ひめぐらさぬもなし、さ程ども尤は尤の色な川ども其磧が太ひし如くあかぬやの半七八百屋のお七がたぐひ古より幾いといふ限りの無い心中

とて死したる単を夫婦にして置きて見たし、追付火吹竹持し夫婦いさかひ町中の騒ぎなるべしと言へりしも尤の事なり、浮気といふものゝうち男程浮気なるものはなし、もと男女の語らひの至極面白いといふ色欲の骨髄を知らぬ故なり、色の深いといふ其深い骨髄を知りぬいてからは只〆中にて一旦交はせし事杯をひっくり返すといふ事はないことなり、信の一字を守る故ぞかし、信は五常の秘籌の如し、色にても欲にても萬物の事はなるゝといふ事なき物なり、至り〳〵ては平生となる、我が儒の工夫学問功を積み書に博からずんば色欲の大極意は知るゝ事にあらず。

契情眞髄

菱屋の東路がいいしは、男にわきがと口中さへなければつとめいたします、渡しきつた身ぢやとぞんじまする故少しもいとひはなきはずのことなれども、去りとてあにしめ見ても聞てもいやな客ありどうしたことやらあの人は、それ程色も白うなうて器量もようはないけれども其けはい移り香どうしても忘れられぬ程ほるゝ客あり、十会あひましても一会ほど思はぬ客ありといふなれども、色白い、口元がわゆらしい客ほどに思はぬこと実正ならんといふに、夫れは馴染といふものゝ由、成程どうしても馴染むといふ事なふしては何

程の業平にてもなびかぬといふも正説なり、欲ふかくいふならば、業平に金銀持せてべだてかわゆらしく年も二十一二斗りにして親父といふものなく此里にぱつとはなしかけなば面白の有様やと渙るふぬの火に鮎の寄ごとく女郎もかゝり玉ふこと疑ひなきこと成べし、世に左様の人物斗りありなば顔色わるきもの共は左様の大臣にの引つけられ無念たび〳〵成るべきに佛も神もよひかげんの割合に拵へたまふぞと云ふもおかし、京屋のしなの（大坂の天神）紀州屋源州の女房には床故に成り、伏見屋の江口（江戸の格子）津川勇州の女房となりしを見れば女郎にもよいといふ女郎もわるいといふ男に添ふ故に如何にしても口惜しき太夫のふいしはより物はなれ物と思ふよしなる事なり、去

りながら女郎はともあれ男のべのかわらぬからは放るゝと云ふ事あるまじきよし。

島原太夫

此頃夫婦連にて島原に遊ぶ入あり（此女房は窪屋かほるといふ格子女郎なり）江戸にて夏くの太夫方をも見、大坂にても名のある太夫格子をも見たれども今度島原に行きて一文字屋の奥州といふ太夫を見て膳をつぶしけるといふは大抵のことなり、夫婦ともに昔のすい入なれど腰をぬかせしといふに任せていかさまにも男は格別の事なり、女の殊に全盛の名をも得又それ〴〵の女郎方をも見し入なるに如何にして其様に誉められ

ることぞ定めて大抵のことにてはあるまじ少し斗り話して聞かされよなど言ひしかば、中々言葉にて百分一が半分も将の明かぬことながら抑此太夫と申す去りとは説教の出しを聽く如くをかしけれど根を押して聞くに、年の此十九か上にてははたち斗りの由、上紫にして下白きに墨絵のうちかけ素足にて丈高からず低からず少し痩せて目元のよいといふことは大抵のことなりどうも目に於て水晶もよだれを流すべし、八文字の一格を放れ生のまゝなる探出し歩み腰の据りは位あり、顔成程ちいさく、眉黒く、いたい口元のかわゆらしさは愚舌にて評することぞ天のとがめもおそろしければ言はぬがよしなり、つゐ発遣手引ふゐ下男の日がさ折節持ちやうや悪しかりけん少

しにたりとわらいて其かさを御世話になされ綺羅のたえがたき袖口より疑ふ所もなき白梅のいまだ咲き初むる様なるゆびさしてタ日まばゆがり給ひてまゆずみの所へかざしぎふ所さりとては雪の如くなる襟にらつりて其姿中々腎の臓をけはだたしめ六根にしみ〳〵としてあのタ日にはばかりながら煙草一ぴくのむ程あやかりなせば御愁のお目元今一度おがみしぬべきにさりとは〳〵無念〳〵は言ふもくだなり世には如何なる善きたねを蒔きて此太夫に寒い夜も〇〇〇〇〇貰ふことぞとおどりあがり〳〵咄すを聞きて最早は〇〇〇〇〇〇〇なす入よりも〇〇〇〇〇〇〇年若なる故ぞといふに此太夫姓の如何でや見て来て話せとタまぐれ小林といふものに蝦夷ヶ島といふ

奥州角力の勧進を見ながら上方へ遣はしけるに、小林帰りて言ふには、余り美しすぎてわるうござりますといふ、そちを折角見せに遣はしゝによすぎてわるいといふことべ得がたしといふに、小林が目には襟元のみ美しうして目元はいやふりといふ、去りとは人々の目好きにて女郎にも好き給ふ男と好かぬ男あるべしいかほど手前にはよいと思ふて見ても人はわるいと思ふも今の奥州が如し、萬のわざにも亦此たぐひあるべし、よく〳〵聞くに此太夫は嵯峨の釈迦と同作の由、なぜといふに三国無双の名城といふよし、是も行きて見ねば計りがたく、成程はじめも言ふ如く器量にはほるゝとも其坐つき物腰には恋路の障りがちなる多しと言ふ由あり。

色道好々譜

あの娘は春日野の鹿なり、あの娘は富士の鹿なりと言ひし物語りも嘘にてはあるまじと言ふに、去る人の言ひしは〇〇〇〇〇形にて知るゝものなりといへり、神代巻をよみて見れば、あなうましや男にあひぬと女神はじめての〇の時御感ありしを見れば、ずっと昔しは古いの新しいのといふ事のなかりしものならんと合點する人のあれどもさういふたものにてはなしといふ、後家好の某富沢町の古蝴といふ末社のかたりけるは〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇きりつけし折には殊の外〇〇〇〇〇の丶由といふに、昔白雲が點にて百韻せ

し俳諧の中に「火燒にもくらして猫の恋べ」といふ句に「雪の日ことに起る古疵」と斯様に付けしも下べ思ひ出しておかしきに兎角世には其道々にすきゞ〳〵ありて、古きものを好くあり、新らしい物をすくあり、新らしくもなく古くもなきをすく人あり、余などがべから見れば、〇などに心をつくることといやしき事なりと思ひ兎角女も若衆も顔容こそ忘られぬと思ひぬれば、即古が言ふには、それはお前の今から九年か十年も過ぎて御覚なき故の事なり、三十になりてからは食物に世話あり地女が好きになるといふ、兎角其時にならぬば知れまじきと思ふ、余が友達に〇の左の大のといふものどもは、昔しから若衆ぎらひ殊に吉原にも行かず瑕町をも狂言より外は知ら

ずに暮し傾城といふものは順が和名鈔の詞でのみよみなし遊女の夜
鷹のと物出さそうにのゝしる生れ是も病にていかほど療治せしかど
治らぬものなるべし。

魚題

備中国にて、農家の女、嫁して程なく出されければ、外へ嫁しけ
るが、又出されける程に、父の家に居けり、此女十六七歳なりける
が、生れつきすくやかにて男めきたり、心も剛にして父が村里の夜
使などにあたりぬれば、代りゆきて、夜半といへども憚れざりけり
其隣に同じころなる娘有しが、いつとなく懐姙しければ、父その夫

をさま〳〵と云けるに、初めの程はかくせしが、後にはかの女と通
して斯の如くと云けるに、父怒り驚き、此事を告て問ふに、此女初
は女なりしが、いつとなく男になりけるとぞ、さて互に爭ひて訟出
ければ、奉行所にて仔細を尋問されしに、父の云ふ様、今迄男にな
りたるは存ぜざりしが、此女生れし時、〇〇の上に少し膿れたるご
とく小さきもの有しが、年ゆきては更に存ぜず候　再度迄も出され
しを何故と存候つるが、かゝうのことにても候はんかと申すに、其
女に問はれしかば、父が申すごとくいつしか年たくるに從ひ男〇と
なり、近頃は〇〇彌通じなくなり候と申せしかば、さらに羞ひて婿
とすべし、男子に変ずるは吉端なりとて、賜ものありしとぞ、奇異

なることとて其国の人の語りしとぞ、白石の鬼神湯に、女子化して丈夫となるを陰昌と云竹書紀年殷紂の時女化して男となる、漢晋宋明にその事有、男の子を生得るも宋明にありしとぞ、と見へたり、誠に怪力乱神の説にこそ。

石女論

世に石女と言ふて子を有たぬ女あり、すべて世間に子を持たぬと斗り、心得る事なり笑ふべし、男女共に此病あり、女房持って生涯子のなきものあり名づけて是を天閹といふ、俗語にこれを黄門と言ふ、昔は晋の海西公この病ありて子なし、北齊の李子生れ亦がらの

天閹なり、また大般若經をよみて見るに五つの黄門あり、一を半釈迦といふ〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇ても子なし、二を伊利沙半釈迦と言ふ此病は〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇見へぬを言ふなり、三を扇横半釈迦と言ふなり是は〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇子のなきを言ふ、四を博沙半釈迦と言ふこれは日本にて二形と言ふものなり、半月は男となりて……を生じ半月は……なし、或は女の姿になるものあり、五を畱拏半釈迦と言ふこれは罪ありて一物をそがれしものなり、子を生ぜすと佛も説給へり、又周禮に曰く奄人といふ事鄭氏が日々心気ふさがりてかくすものなりと言ふこれは……なき者役にたゝぬ人を唐土にて女中と打交り勤めをする役人なり、周公瓌

が奇東録にも詳にありよく〳〵見るべし、五不女といふ乙女にも後にたゝずの女あり、五の名は何ぞと言ふに螺紋皺角脈の五〻の品あり、李時珍が曰く螺といふは女の〇〇めぐりめぐりて〇〇物ありほら貝のねぢれたる如し、紋といふのは実女とも言ふ〇〇〇皺と言ふはいづれにも〇〇〇〇〇〇〇〇煙管の吸口程〇〇〇角と言は鹿の角のごとし、古人と〇〇名付るものゝよし、脈と言ふは一生〇水とゞこうらずして或は崩漏帯下の如し、これら五不女とて後に立ぬ女の事あり、入部志に見えたり、其外双子を持つもあり、三〻子を持つもあり、四〻子を持つもあり、西樵記といふ書に揚州の百姓一度に五男を生めり、皆育ちしとなり、玉水玄珠密語と言ふ書にいひしは

一産五男なれば天下泰平なり、一産三女なれば天下騒乱なり、十子を生ずれば諸侯位を爭ふと、或時は十人まで産む事もありしにや、五人三人一度に生みし人には帝より米を下さるためしなり、国史にも日本にてありし事を載せたり、医学正傳に書のせしを見れば懐孕して十七八月より二十四五月に到りて子を生みし事あり、また劉歆叔が異苑といふ書には大原の温磐といふ人の母、孕む事三年にして産むと言ふ、又七月子は猶うみて育ちぬべし、八月にて生るゝ子はそだちがたし、八の数変じがたく七の数は変ずる易經の言葉の如し其外に多くの書物にて考ふるに晋書には苻堅といふ者の母孕みて十二月にして産み劉明が妻孕みて十三月にして産む、張華が博物誌に

曰く寮入孕む事二十月にして産むといふ、搜神記に曰く黄帝の母名は附宝孕む事二十五月にして帝を生めり、又魏略にも六月孕みて産したる事をのせまた三十回春秋にも劉綱が母懐む事十五月にして生るといへり、其外野客叢書のたぐひ入塊篇ことゞく誌しがたし、史記には左の脇より三人を産みしことを記し魏志と云ふ書には、右の腹より破れて子を産める事を記す、異苑は曰く架宜が孕みて産せず、産月に到りて嶺の上に瘡を生じたり其瘡より破れて子を産めりと言ふ時は嶺よりも子を産む事あるべし古き物がたりたり、晋の代遇宜が女房が孕む事あり、或時…の つゞ根甚だかゆし、かき破りて瘡となり瘡の中より子を生めり…も子も息才なりしと見えたり、釈

迦譜杯を見れば佛も摩耶夫人の右の脇より生まると言ふ、又野史と言ふものには甫田の市人の妻男の子を生めり、これも〇の所破れて母子共に息災なりしと誌しぬ、嵩山記に曰く陽翟といふ人の女房孕む事三十月、ある時脊中破れて子を生めりとかや、郷那代酔といふ書に記せしは武化年中の事なりとかや、客州の一婦入孕みてありしに脇腹に癰といふ瘡出来たり其瘡の中より子を生めり、本草綱目に曰く明の隆慶五年二月の事なりとかや唐山の縣氏が妻孕み左の脇腫破れて子は左の脇より生れたり母もつゝがなしとかや、或袋の如くなるものを生み毛ばかりのものも生み目もなく口もなき物を生むこと諸書に載せたり、挙げて数へがたし、宋史といふ文も見給ふべし

〇〇の脊中に生じ、〇〇頭にある人杯見えたり覚じてこの類ひかぞへがし、女たる人必ず〳〵かゝるためし聞き覚え置くべき事なり。

女郎買の大意

まづあはれと思ふ女郎には、隙日をかゞてやくそくし、其日になれば萬事風流をつくし、名ある太鼓持藝者をつれ茶やへいたり、廊中の藝者を両三人よび、ともし火いでゝ後女郎やへゆき、其女郎の格にしたがい新ざうをあぐべし、座敷の取さばきは太鼓にまかせ、諸事大体にありたし、さりながら金銀を無益の事に遣ひ捨べき事にあらず、又穴しりがほになりて、さゝいの事にかゝわるは、至ていやしうして遊びの体下品なり、たとへ太鼓もつれず独り遊び、或は連のみにていたる客も、此べ持にて遊ぶべし、もとより客畜の人は足を入るべからざる地なり、又入によりて、女郎は金にて買ものなれば、衣服容貌にかゝはらず、たゞ金をつぶてのごとくにする時は足れりといふ説あれど、至て通ぜざる論なり、元来女郎は栄燿のものふけ遊楽の最上なれば、まづ髪容より衣服にいたる迄、華美風流を蒙へとすべし、言語衣服野鄙なるときは、一ト夜なりとも情にあづからず、是女郎かひの大意なり。

客と半可と吉原好と色客との辨

およそ吉原へかよふも、大体べを用ひずしてはなりがたし、みづから野暮なりとおもふものはなく、通りものゝべもちにてゆくせ、千差萬別一チがひにろんずべからずといへども、そのうちひととほりの容あり。半可のものあり、ただ吉原がすきにてかよふ客あり、又眞の色客あり、いづれわが女郎をほれずしてかよふものはなし、女郎もつとめの事なれば、いやとおもふ客にても、ほれたかほはせねばならず、是をひとへにまことゝ思ふは、おろかなる事か、此方はひとりを相手、女郎はきのふ西国の客にあへば、けふは奥州の入にあふ、晝武家にあへば夜は町入にあふ、此わりで見れば一年中には七百廿入、そのうちにひま日もあれど、すくなくも三四百入はか

わるべし、その中でえらばるゝといふ事、大かたの事にあらず、たとへていはゞ室引のごとし、まことのふんどん付なる縄かと、十入に九入まではうか〳〵とからなはをひかへている也、てまへの縄にはふんどんのつかぬといふを見てとり、はやくはなすを通りものとも推ともいふべし、からなはばかりいつまでもとらへてゐるやぼといふ、さりながら所々にて引いて居るうちには、まことのふんどんにあたらぬといふ事もあるまじ、しからばわが気にあふ女郎のあるまでは、あそこゝとかふて見るべし、扨たゞの客といふは、諸事大やうに、女郎のしかたあまりこまかに手をいれず、月のうちに二三度づゝゆき、女郎のさはりてゐる時も名代をすなほにとり、折ふ

しのもん日におうにさうしまひ、節句まへにぶさたもせず、さして
おもしろみもなく、りちぎにかふなり、これ只の客といへども、と
しをへてなじめば実の色客ともなるべし、又通りもの風にてしやれ
もいひ、小田原町藏前辺はもちろん、その外名ある人をば、きゝお
よびしまゝ大ていはちかづきがほにいひなし、女郎をも相応にかひ
こなすを半可といふ、此輩当世もっぱら多し、扨よし原ずきといふ
は、吉原の酒をこのみ、月に五六度も出入りの座頭などをつれ、仲
の町へ行とそのまゝ大はだぬぎになり、たらひに湯をくませせんそ
くつかふ、そばより女房はさかづきを出し、すい物の出るまであり
合のさかなにて酒事になるうち、あひかたの女郎ひまな新ざうをあ

りたけ引つれ、えんがはにこしをかけて、さけのすぎるを一トとほ
りにとむれば、新造禿はさし心へ、よぬんもなくいせをんどうをう
たふてゐる客の肩も脊中もえんりよなく引ッたつれば、片息ながら
千鳥あしにて、女郎やのはしごをじたばたとふみならし、ざしきへ
あがると、まづ醤油じみたかづのこ、しなびた九年ぼで、やたらの
みにのむうち、女郎は外にてあそび、よいかげんなじぶんざしきへ
ゆき、酔つぶれてゐころんでゐる客の鼻のあなへこよりをいれ、あ
るひはつめりなど、かれこれとからかふ間に、夜食もでれば女郎は
又去、いろ客のつれの居るおくざしきへゆき、うわさをしながら酒
をのみ夜食をくひなどするうち、かのざしきには床もおさまれども

女郎は大ていにてゆかず、夜ふけて行て見れば、前後もしらず大いびきのわきへそっとはひり、世なかあわせに一トねいりするに、はや茶や船やどはむかひに来れば、やう〳〵と目をさまし、帯をしめはをりをきるまでとくと仕度をさせたうへで、ぎり一ぺんにとめるあいさつそのうへむかふ節句のやくそくをがてんして帰るなど、是女郎にかまはず、吉原好といふものなり、又眞の色客といふは、貪富貴賤によらず男気量風俗にもよらず、たがひに如才なく思ふべより、なじみもふかくなれば、起証入墨小指切髪を切るなど、一チがひにうわきともいひがたし、すべて女郎は昼夜萬人をあひてにして、当世風の色男をも茶づけめしのごとくおもひ、いろどる客はな

をさらをかしくおもふものなり、そのうちにひとり眞の色客ありてまことをつくす日になれば、たとへ萬人の肌はふるゝとも、なかなかべていのみだるゝものにあらず、其まことをつくすといふは、人の気のつかぬずんとこまかな所に眞実があるものゆゑ、ねつゞけに居てもすこしも傍をはなるゝべなく、夏の夜のあつさもわすれ、冬の夜のながきもみじかしとかこち、又下からよびにくるおりも、よくぬ入ってねるといへの、あるひは酒がすぎてたあいがないといへの、又仲の町へ行しなどとうちなぐりにしておき、しばらく相見ざれば日文をも遣し、はうばい女郎のしたしくするをりんきし、衣類金銀のさうだんはもちろん、客帳をくりひろげ、外の客の文どもを見

せ、なじみの客の切引事にいたるまでも、のこる所なくまことをあかせば、客もしぜんといつはりなく、たがいにかざるべなきを眞の色客といふ。

女郎の心を見わくる辨

よき女郎には、地色などといふ事大ていはなき事なり、たとへありとても一トとほりの目利にてはしれぬものなり、同じうちにゐるほうばい、やり手の目をさへしのびてする色事を、たま〳〵ゆく客のめにかゝべきや、さりながら色事をする女郎は、茶やの男又は内のこし元などゝひたもの耳さうだんをし、あるひは用もなきに表へ

でたがり、見せに居てもまがきに入あしらしげければきよろ〳〵とし又二かいに居てもそとにうたの声でもすると、そは〳〵としてにわかに思ひ出したやうに、ざしきをたつ事などたびたびあり、すへてうら茶やへ不断入りこむ女郎にゆだんはならず、此中にも客色地いろの品はあれど、大かたは所のげいしや、茶や旅やどの男、小間物うり、かゞゆい、大かぐらの類なり、これらはいつも女郎のかたより仕着をしたり、小遣をおくったりするゆゑ、いかほど客よりもらひても、いつもはだかにて、ざしき持でも分眼なさうおうに衣服もあしく、だん〳〵ぶはんじやうになるものなり、そのくせ座しき持か部や持でなければ、色事はせぬものぞかし、部やももたぬやうな

女郎は、いかほど思ふても工面もならず、たゞとうぶんのそよめきにてしみた事はなし、又地色をかせぐ男は、ちと身代のよき女郎をば、ふづかいと見てかゝるゆゑ、男の方から色をしかけたり、又女郎の方から手をだすをさいはひにもちこむなり、利口にさへ立まはれば、一人でふたりも三人も色をもたぬはなし、さるによつて、その色をとげて夫婦になるものは決してなき事なり、しまひにはまる裸になりて、年の明じぶんは向の男にはづされ、せんかたなくおもひよらぬ浅猿しき所へむり嫁入をし、あるひはやり手になるなど、是色事をしすごしたる女郎なり、客三人まへにもむかふべし、たとへば紋日などに見せにねれば、さっそくにしまひ、初会の客は一ト

目見ねばならぬなどゝ、やつぱり客より一チだんうへをゆく者ありて又その家の親方と色をする女郎はよく心ゆるるものゆゑ、まづさうたいを鼻にかけ、朋輩女郎と仲あしく、何事をもはゞに取さばき、ひる見せへはおそく出、やりて若い者のせいとうも用ひず、諸事わがまゝに見ゆるなり、又客色といへども、大ていは地色と同じ心持なり、是蔭一のきずながら、女郎の身にしてのおもしろ味は、客より色にあるべし、なんぼ眞実なとおもふ客でも、客と名目あり、べていのみこまぬ色にても、色といふ名にておもしろかるべし、たとへよき女郎にも、一ト通りも二タ通りもいろをせぬはなかるべし、今さいちう色にかゝつてゐる女郎ならば、とかくあわぬがよし、たとへ

色客になつても、ずゐぶんと心をゆるさず、その女郎に色事のできぬやうに用心するが肝要なり、うわきなる女郎は、いろ〳〵とくどかれたら、ふとその心になるもあるべし、はじめ一二度入のくどくうちは、ほかよりしれてはなるまいと、なぞらへてはなしもするものなれど、その場をひよつといひおくれて、たびかさなればいひだしにくし、萬一さやうの事にて色事もできば、すゐぶんとおちつくべし、しかし人情にて、今まで眞実なと思ふほど腹の立やうもつよく、すぐにかほを見る事もいやになり、愛想のつくるものなれど、気にいりて始終かはんとおもうゐあらば、見合せてよらずさわらずに、何事もいはぬがよし、どうでもむら〳〵と目にかゝるものゆゑ

、なんぞいいたくなるをずゐぶんたしなむ心にて、よいかげんに気のつくほどになるものなり、すべて色事に眞実なはまれにして、ひとりばかりに命がけの事もなく、あそこもこゝもくどくゆゑ、外のうわき女郎に又色事もできれば、だん〳〵不実があらはれて、両方よりあきゐになるうち、内証もふつがふになるを見すまし、前々の通りせわにしてやれば、もとがいやでない客ゆゑ、女郎はゆめのさめたやうに後海おこり、なほその客がはじめより一ぱいにふかくなりて、色事はやむものなり、とかく仕打を見て取さばくを、通り者といふべし。

珍説（一）

△ 黒眼がちなるもの
△ 髪の毛太きもの
△ ちゞれ髪のもの
△ 毛あつきもの
△ 顔桃色の如きもの
△ 足の親指上るもの
△ 生え際の濃きもの

是等のうち一つにてもある○○は皆上品の○なり。

診説（二）

△ 眉たるゝもの
△ 白眼がちなるもの
△ 顔長きもの
△ 唇うすきもの

是等のうち一つにてもある○○は皆下品の○なり

○

△ 首短きもの
△ 唇少し厚きもの

是等のうち一つにてもある○○は皆中品の○なり

珍説（三）

△口大なるもの

△鼻の穴拡きもの

△足体より小さきもの

是等のうち一つにてもある○○はその○大なり

珍説（四）

△鼻長きは

○長し

△口廣きは

○廣し。

△鼻のうち廣きもの

目のたるきものは皆

○の○長し

△口のはた産毛多きものは

○の○多し

珍説（五）

△顔の長短にかゝはらず

△ 頬尖り、少し中窪みたるもの

眉は濃きらすきによらず

△ 眉毛さがりゆがみたるもの

△ 目象の如く細長く

への字なりにてあと下りたる二重眼

△ 入に逢ふ毎にはかに上毛のまぶた一つになり笑ひを含む目

△ 常に涙ぐむ様に見える眼

△ 風眼つかふもの

△ 口大きく

唇つやなく厚きもの

△ 耳のたゝ厚きもの

△ 顔の色油ぎりたるもの

△ 腋の下に毛の多きもの

△ 顔の色黄色にしてだゝたるもの

△ 髪厚く生え下り濃きもの

是等のうち一つにてもある婦人は皆淫乱の気ありてゞ定まらず。

昭和三年八月十九日印刷納本
昭和三年八月廿三日発行（非賣品）

東京市外巣鴨上駒込三一六
編者　谷口好古

東京市外高田雑司ヶ谷水久保一四八
発行者　伊藤梅吉

東京市外巣鴨上駒込三一六
印刷人　古典社

発行所　振替東京七七一〇〇番

国立国会図書館

終